

CV₁C V₂オノマトペにおける V₁と V₂の配列

小 野 浩 司

The Distributional Analysis of V₁ and V₂ in CV₁ CV₂ Mimetic Words

Koji ONO

要 旨

オノマトペの分析が依然盛んである。なかでも、オノマトペの内部構造を解明しようとする音韻論的・形態論的考察とオノマトペが象徴する意味を解明しようとする意味論的考察がその中心となっている。本論はオノマトペの音韻論的考察を行ったものであり、とりわけ2音節から成る CV₁ CV₂ 基語に含まれる二つの母音 (V₁ と V₂) の配列を調査し、そこに何らかの傾向あるいは規則性が見出されるかどうかを調査した。結果として、V₁ と V₂ の配列の仕方には一定の傾向が存在することがわかった。その傾向の一つ目は、V₁ と V₂ が同一の場合のオノマトペ全体に占める頻度が非常に高いこと。二つ目は、V₁, V₂ のいずれにおいても、それが/e/である場合のオノマトペの数が少ないこと。三つ目は、V₁ が/a, o/で V₂ が/i, u/の場合のオノマトペの数が多いこと。四つ目は、V₁ が/i, u/で V₂ が/a, o/の場合のオノマトペの数が多いこと、などがわかった。また、本論ではこういったいくつかの傾向の存在を確認するだけでなく、なぜこのような傾向が存在するのかの解明も試みた。本論で援用したのはソノリティー階層に基づく二つの制約であり、この制約により第4番目の傾向を除くすべての傾向の説明が可能となった。

1. はじめに

本論は、これまでありそうでなかったオノマトペにかかわる音韻的考察を行うものである。具体的には CVCV を基語とするオノマトペの最初の母音と2番目の母音の現れ方を調査し、そこに何らかの傾向あるいは規則性が見出せるかどうかを検討するものである。かりに、なんらかの一定の傾向が見出せれば、それはとりもなおさず日本人がオノマトペを無造作に創造しているのではない証拠となり、オノマトペ研究の新たな成果となりうるであろう。しかし、上で「これまでありそうでなかった」と述べたように、CVCV を基語とするオノマトペに含まれる二つの母音の配列に関してこれまで目立った研究成果は発表されていない。もちろんこの原因をオノマトペ研究の未発達に帰することはできない。それどころか、オノマトペに関しては他の領域に勝るとも劣らないほどの研究がなされ、意義のある重要な発見がいくつも発表されている。ではなぜ本論で議論しようとしている音韻現象に対しては、研究の対象から外れたのであろうか。

これは思うに、CVCV 基語の母音配列の仕方に意義のある傾向は見出せない、多くの研究者達が先入観を抱いていたからではないだろうか。実際、日本語のオノマトペを外側からざっと眺めただけでは確かに二つの母音の配列に規則性は見出せない。この先入観がこの分野での研究を遅らせたと考えことができるし、本論の意義もまさにここにある。このような先入観から脱し、果たして本当に当該の母音間になんらかの傾向も見出せないのか、この点を探ることが本論の目的である。

2. データ

オノマトペを構成する基語の内部構造からオノマトペを観察した場合、2種類に大きく分けることができるのはよく知られた事実である。すなわち、2音節から成る CVCV 基語と1音節から成る CV 基語の2種類である。本論で検討するのは前者の CVCV 基語であり、それに含まれる二つの V の種類とその頻度である。使用するデータは、角岡 (2007) の巻末に記載してある1652のオノマトペである。このデータのなかから CVCV 基語 (1196語) のみを選別し、そこに含まれる各母音の分布を数値の形で調べてみた。角岡 (2007) のデータを援用する理由は言うまでもなく総数の多さである。ついでながら、角岡自身は Kakehi *et al* (1996) の見出し語をもとに自らのデータベースを構築しているのであるが、Kakehi *et al* (1996) がオノマトペ辞典として確固たる地位を築いていることは周知のことである。

VCVC 基語の最初の母音を V1、2番目の母音を V2 として1196語のなかの母音の分布を示したものが表(1)である。表(2)は表(1)の具体例のごく一部を示したものである。

(1)

V1	V2	i	u	e	o	a	total
i		48	32	2	30	77	189
u		28	95	12	22	114	271
e		6	4	3	34	51	98
o		58	56	21	145	77	357
a		61	60	1	16	143	281
							1196

(2)

V1	V2	i	u	e	o	a
i		pisi tibi	piku siku	zime	ziro hiso	tima pira
u		gubi zusi	butu puru	mume sube	gusyo zupo	sura puru
e		meki neti	depu teku	dere	kero neto	hera peta
o		tyobi poki	potu zoku	dote poke	goto toro	bosya pota
a		paki kari	tapu waku	same	dabo mago	kata wana

表(1)に挙げたデータの実際の分析の前に、CVCV 基語について少し補足しておかなければならない。CVCV 基語とはオノマトペを構成する最小の基本語のことで、(2)に記載しているものがそれに当たる。

しかし、一般にはこれらの基本語だけで実際のオノマトベが成立しているわけではない。基本語を繰り返したり (paki-paki)、基本語の語末に促音、撥音、長音を加えたりして (pakiQ, pakiN, pakiR) 実際のオノマトベは作られているのである (Q は促音, N は撥音, R は長母音の第2母音)。

表(1)に記載の数字は角岡 (2007)、ひいては Kakehi *et al* (1996) に記載されている CVCV 基語をもつ出し語の数であるが、しかし、撥音や促音などの特殊音が付いたオノマトベとそれが付かないオノマトベを異なった語彙として扱うべきであるかどうかは疑問の余地があろう。たとえば, pakiQ, pakiN, pakiR, paki-paki はすべて paki から派生していることは疑いがなく、したがって、真に表のなかにカウントすべきは特殊音や繰り返し部分を省いた paki 一つだけではないか、という疑問が生じるかもしれない。さらに, boto vs. poto, kuru vs. guru に見る有声子音と無声子音の交替, gasa vs. gasya, dota vs. dosya に見る口蓋化の有無による交替, さらに pira vs. hira, poka vs. hoka にみる p-h の交替において、カウントすべきは無標形のほうではないか、という疑問を抱くかもしれない。しかし本論では、すべての CVCV 基語に促音や撥音が接続するわけではないことから、やはりこれらの特殊音の接続にはそれなりの理由があつてのことであり、有標、無標を問わずそれぞれのオノマトベをトークンとしてカウントすることは重要であると考え。つまり、これらトークンを表(1)から外すことはかえってオノマトベの実態を捉え損なう恐れがあると考えるのである。念のために表(1)の総数から特殊音を付加したものと口蓋化したものを除き、また、p-b-h 交替において h 以外を除いたものの数値を下に記載した。これによれば、総数の違いこそあれ、全体の傾向はほぼ(1)と変わらないことがわかる。以上のことから、本論では表(1)に基づき、議論を進めることにする。

(3)

V1	V2	i	u	e	o	a	total
i		25	7	1	14	25	72
u		11	29	7	8	39	94
e		5	3	2	12	20	48
o		21	16	12	41	29	119
a		20	16	1	5	32	74
							407

3. データの分析

3.1. 概 観

本論の目的は、表(1)をもとに、オノマトベの形として最も一般的な CVCV 基語の二つの母音の現れ方を調査し、そこに何らかの傾向があるかどうかを見極めることである。

表(1)でまず目に付くことは黒く塗った部分の数値の高さである。この部分是对角線上にあることから第1母音 (V1) と第2母音 (V2) が同じであることを示している。後述する /e/ を除いて、/o/ と /a/ についてはこの線上の数値が最も大きく、/i/ と /u/ については第2母音が /a/ である場合を除いてやはりこの線上の数の数値が最も大きい。これらのことから、V1 と V2 が同じ CVCV オノマトベは日本人に好まれる傾向にあるということが言えそうである。理由は、もちろん、同じ母音の繰り返しが日本人の音感に心地よいということもあろうが、下でも述べるように、同一母音の繰り返しは「ソノリティー階層に関して、V2 が V1 より大きくなってはならない」というソノリティー制約にも違反してない点が重要な要素に

なっている。表(1)で次に顕著な傾向はV1が/e/の場合のすべての組み合わせの数の少なさである。これはV2が/e/の場合にも言えることであるが、この原因が/e/の音象徴性にあることは疑いがない。/e/は卑俗性を象徴し、それがゆえにhera-heraのheraやdere-dereのdereもまた卑俗なオノマトベとして扱われる(/e/が象徴とする卑俗性についてはHamono (1998:76)を参照)。卑俗な言葉が好まれないのは世界共通あり、V1に/e/をもつオノマトベの数が極端に少ないのもこの原因によるものと考えられる。

3.2. ソノリティー分析

表(1)に関して上記の傾向ほど顕著ではないが、V1とV2に関して別の一定の傾向が見られる。それはV1が/a/であってV2が/i/と/u/の場合の数値の高さであり、また、V1が/o/であってV2がやはり/i/と/u/の場合の数値の高さである。加えて、V1が/i/と/u/で、V2がそれぞれ/u/と/i/の場合の数値の高さである。本論ではこれからこのような現象を誘発する要因を探るつもりであるが、しかし、問題はそれほど単純ではない。なぜなら、この現象と以下に示すさらに複雑な現象をも同時に説明しなければならないからである。その一つ目は、表(1)のすべての場合においてV2が/a/の場合の数値が極めて高いことであり、とくにV1が/i/, /u/, /e/の場合においてこの点が顕著である。二つ目は、V1が/o/の場合の全体的な数値の高さである。他の母音がV1に来た場合、他の母音との組み合わせには数値上波があるが、V1が/o/の場合このような波はない。

このように複雑に絡んだ事実を一挙に解明することは困難であるし、今のところ解決に向けての決め手に欠くが、本論では、「ソノリティー」あるいは「ソノリティー階層」という視点を用いてこれらの事実の解明の一助としたい。ソノリティーの定義についてはいろいろところで解説されているので、ここで改めて触れることはせず、以下に母音のソノリティー階層についてのみ示す。

(4) $a > o, e > i, u$

(4)の階層は広く一般に用いられている階層であるが、この階層に一つの制約を加えることにより、上で述べた事実、つまり、/a, o/がV1で/i, u/がV2であるときの数値が他と比較して非常に高いという事実が説明可能となる。その制約とは隣接する2母音間のソノリティー階層に関する制約である。

(5) V1とV2のソノリティーの大きさは $V1 > V2$ であることが望ましい。

(6) V1とV2の差は大きいほうが望ましい。

(5)は最初の母音のソノリティーのほうが2番目の母音のソノリティーよりも高いことが要求し、(6)は(4)との連動で、/a/と/i, u/の連続のほうが/o, e/と/i, u/の連続よりも好ましいことを規定している。これら二つの制約により今問題にしている事実、すなわち、V1が/a/で、V2が/i, u/の場合のオノマトベの数がV1が/a/で、V2が/e, o/のオノマトベの数よりも多いということが説明される。なぜなら、前者の場合は(5)と(6)の制約を同時に満たしているが、後者の場合は(5)のみを満たされているからである。満たしている制約の数の多さが具現化するオノマトベの数に比例すると考えることができる。

話題を/o/に転じてみると、/a/と似たような状況が/o/にも生じていることがわかる。つまり、V1が/o/でV2が/i, u/の場合の数値がやはり高いのである。ただし、V1が/o/の場合と上で見たV1が/a/の場合とでは、前者が(5)のみを満たす一方で、後者は(5)と(6)の両方を満たすという点で異なる。先に適合す

る制約の数が具現化するオノマトベの数に比例すると述べたが、このことは今の場合にも成り立つ。というのも、V₁ が/a/で V₂ が/i, u/の場合全体に占める割合は約4割であるのに対して、V₁ が/o/で V₂ が/i, u/の場合全体に占めるが約3割に減っているからである。

さて、ここで本論の分析が抱える問題点の一つ述べておかなければならない。それは、(5)と(6)の制約により/a/と/i/あるいは/a/と/u/の連続が保障される一方で、これとは逆の/i/と/a/あるいは/u/と/a/の連続が不適切な連続として敬遠されてしまうという点である。しかし、表(1)あるいは表(3)が示すように、事実はこの予測とは異なる。/i/と/u/が V₁ であり、/a/が V₂ であってもオノマトベの数は少ないどころか、非常に多いのである。この点は解決しなければならない大きな問題と言える。

これに答えるには、音声の観点からオノマトベを見るだけではなく、オノマトベがもつ「音象徴」(音と意味の対応)な側面をも考慮に入れる必要がある。多くの文献がすでに指摘しているように、母音/a/は他の母音に比べ口の開きが最も大きいことから、意味的にあるいは音象徴的に「広さ」を表す。また逆に、/i, u/は口の開きが小さいことから、意味的・音象徴的に「狭さ」を表すことになる。そうであるなら、/i, u/から/a/への音連続は「狭い場所から広い場所への移動」を含意し、このことは、かなり飛躍するようであるが、音や光といった物理的な物質が「ない状態からある状態へ広がるように移動する」、あるいは単に「物(事)が前へ進む」というふうに解釈し直すことができる。このような解釈に基づけば、なぜ/i, u/から/a/への音連続をもつオノマトベが、音や光の発生・進行、さらには物体の進行を表すことが多いのかの説明がつく。V₁ が/i/で V₂ が/a/のオノマトベは全部で77個あるが、その中には/ziwa(-ziwa)/, /gira(-gira)/, /pika(-pika)/, /hita(-hita)/, /kira(-kira)/など、光や水、その他の物質が進む様態を表すものが多く含まれている。また、/nita(-nita)/や/niya(-niya)/は笑いが無い状態からある状態へ進むという点でこのグループに入れてもよいであろう。他方、V₁ が/u/で V₂ が/a/の場合には/i/から/u/への連鎖の場合と同様、/puka(-puka)/, /tuka(-tuka)/, /huwa(-huwa)/, /duka(-duka)/に見るように、物が静止している状態から動き出す様子を表すものが多い。/muka(-muka)/や/mura(-mura)/などは体の内側からあるものが進行する(こみ上げる)と言う意味をもち、このグループに加えてもよいであろう。このように V₁ が/i, u/で V₂ が/a/の例は確かに制約(5)に違反するが、これにはオノマトベの音象徴的・意味的な要因が大きくかかわっているとことがわかった。ついでに言うと、V₁ が/i, u/で V₂ が/a/である場合、制約(6)には従っているので、その分/i/と/e/, /i/と/o/, /u/と/e/, /u/と/o/の組み合わせよりこの場合の組み合わせのほうが優位に立ち、結果として数の上でも優勢となっている。

V₁ に/e/が来て V₂ に/a/が来ている場合も制約(5)に違反しているという点では上記の場合と同じである。しかし、この場合の実例を調べてみると、V₁ が/i, u/のときと同じように、音や光、その他の物質の進行にかかわるオノマトベが多いことに気づく。/gera(-gera)/, /petya(-petya)/, /pera(-pera)/, /mera(-mera)/などがその具体例の一部である。このことから、/e/はソノリティー階層の上で/o/に近いというよりも、むしろ/i, u/に近い母音であると言えるかもしれない。この点はさらに研究を深める必要があるが、かりにそうだとすると、これがオノマトベ特有のことであるのかどうか併せて調査する必要がある。

V₁ に/o/が来て V₂ に/a/がくるオノマトベも多いのであるが、これに関してはこれまでと少し事情が異なる。それは、この場合の数値が他の組み合わせ(V₁ が/o/で V₂ が/i, u, e/のいずれかの組み合わせ)の数値と比較してとくに高いというわけではない、ということである。また、もう一つ興味深い点があって、それは、V₁ に/o/が来ている場合の大まかな数値の分布が V₁ に/a/が来ている場合と類似しているという点である。さらに、V₁ =/o/かつ V₂ =/a/の場合において、V₁ =/i, u, e/かつ V₁ =/a/の場合において見たような音や光、その他の物質の進行を表すオノマトベが少ないこともまた/o/の特徴と言える。/gota(-gota)/, /gowa(-gowa)/, /poka(-poka)/, /hoya(-hoya)/などは物の進行を形容したオノマ

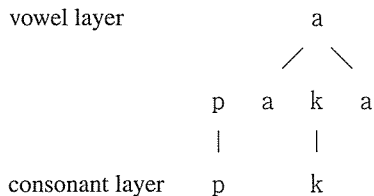
トベとは言い難い。以上のことから、/o/を/a/以外の母音 (/i, u, e/) と区別する理由は十分ある一方で、また/o/を/a/と同列の母音であると見なす理由もある。このようなことから、本論では従来型の(5)ではなく、/o/を/a/に組み込んだ(7)を新たに提案する。

(7) a, o > e > i, u

(7)はソノリティー階層に一見類似しているが、明らかにそれと異なる。(7)は各母音が他の母音に対してもつ相対的な力の階層、すなわち「母音力の階層」と言えるかもしれない。/o/を/e/の上位に置くという提案は、本論が最初ではなく、すでに村田(1984)によってなされている。村田(1984)は独自に人口オノマトペの研究によって/o/を/e/の上に置くべきであると提案した。ただし、村田(1984)では本論よりさらに一步踏み込んで、/o/を/e/だけでなく、/a/よりも上位に位置づけた(すなわち母音の配列を $o < a < e < i, u$ と仮定した)。本論はこのような階層が従来型のソノリティー階層からあまりにも乖離しすぎていると考える一方で、(5)の従来型のソノリティー階層にも問題があると考え、現時点では(7)を最も妥当な階層として設定した。上で、 $V1 = /o/$ かつ $V2 = /a/$ の場合において、 $V1 = /i, u, e/$ かつ $V2 = /a/$ の場合において見たような音や光、その他の物質の進行を表すオノマトペが少ないことを指摘しが、しかし一方で、前者の場合、/dota(-dota)/, /doya(-doya)/, /mowa(-mowa)/など物の進行を表すオノマトペが存在することも事実である。これらのことを考慮に入れると、村田(1984)のように/o/を/i, u/からあまり遠くへ位置づけることは得策でないと思われる。

最後になったが、表(1)に顕著に見られる対角線上の数値の大きさと(5)、(6)の二つの制約との関係について述べておかなければならない。 $V1$ と $V2$ に同一母音が見れる場合の頻度の多さとその原因の一端はすでに3.1節で述べたが、まだ本論で提案した制約との関係については触れていなかった。 $V1$ と $V2$ が同一母音であるということは、実は制約(5)と(6)の両方に抵触していることになり、このことから予測されることは、このような場合のオノマトペの数はかなり制限されているはずであるということである。しかし、事実がこの予測と異なることはすでに明らかである。しかし、この場合の対処法は実は簡単で、制約(5)と(6)に記載されている $V1$ と $V2$ は異なった母音でなければならないという条件を付加すればよい。これらの制約はもともと異なる母音間の母音力の差を測るものであって、同一の母音の差を測るものではないのである。あるいは、韻律論的に、オノマトペのなかの母音と子音の層(layer)を分け、 $V1$ と $V2$ が同一の場合はあたかも母音が一つしか存在しないかのように考えることができるかもしれない。たとえば/paka/というCVCV基語に対しては下の図のように子音は二つ(/p/と/k/)存在するが、母音は一つ(/a/)しか存在しないと考えてもよい。このように仮定することで制約(5)と(6)の適用を阻止することさが可能となる。なぜなら、これらの制約の適用には2種類の母音、すなわち $V1$ と $V2$ の存在が必要不可欠だからである。結果として、CVCV基語の二つの母音が同じ場合の数値の高さはわれわれの分析の反例にはならないことになる。

(8) vowel layer



4. ま と め

本論文は、CVCVを基語にもつオノマトベに関してこれまであまり議論されることのなかった二つの母音の配列とその配列に見られる傾向について調査したものである。調査の過程でわかったことは、1) あきらかに母音の配列に傾向と呼べるものが存在する、2) その傾向を支える重要な要因にソノリティーあるいはソノリティー階層が大きくかかわっている、3) ソノリティー階層で処理できない場合にはオノマトベが本来的にもつ音象徴性にその原因を求めることができる、などである。もちろんこれらの調査結果とその結果に対する原因究明は母音配列表を単に眺めていたのでは達成されず、それなりの道具が必要になる。本論ではその道具をソノリティー階層に対する二つの制約 ((5)と(6)) として提示した。これら二つの制約は、言うまでもなくオノマトベの母音配列を説明のためのものであるが、これと同様の制約が非自立語(助詞・接続詞など)の母音配列の解明においても必要とされることは指摘すべき重要な点であろう(小野(2006)参照)。このことはとりもなおさず制約(5)、(6)が広く日本語に応用される可能性があることを示唆しているのである。

参考文献

- 小野浩司(2006)「日本語の非自立語とソノリティー」『言葉の絆』藤原保明博士還暦記念論文集, 59-70. 開拓社.
笈壽雄・田守育啓(編)(1993)『オノマトピア・擬音・擬態語の楽園』, 勁草書房.
Hamano, Shyoko (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Kurosio & CSLI Publications.
角岡賢一(2007)『日本語オノマトベ語彙における形態的・音韻的体系性について』, くろしお出版.
田守育啓(2002)『オノマトベ 擬音・擬態語をたのしむ』, 岩波書店.
田守育啓・ローレンス・スコウラップ(1999)『オノマトペーその形態と意味ー』, くろしお出版.
村田忠男(1983)「人口オノマトベによる日本語音声ハイエラーキ」『言語研究』第85号, 68-90.